



2021年3月7日主日礼拝メッセージ

日本同盟基督教団 クリスチャンプレイズチャーチ

【小さくても戦いに打ち勝てる道】

聖書：サムエル記第一17章 41-50節/暗唱聖句：ルカの福音書16章10節

説教者：鄭南哲牧師
(Rev. Jung nam-chul)

愛するクリスチャンプレイズ教会の信仰の家族みなさん！一週間もお元気でしたか。まだコロナ禍は続いています、こうして緊急事態宣言が解除され、みんなが教会で共に礼拝を捧げられることを心から感激し、感謝しております。決して、教会で共に礼拝を捧げ、子どもたちが御言葉から学び、信仰の教育を受けられること自体がコロナ禍を通して決して当たり前なことではないこと、どれほど大切で、教会に来られるだけでも大きな神の恵みであり、感謝なのか改めて教えて頂いています。そして、みなさんと共に教会で礼拝を捧げ、共に交わり、共に会えるだけでも、みなさんの存在がどれほど、大切なのかまた新たに痛感する時期でした。もちろん、まだコロナ禍が続いていますので、これからも予防に協力しつつ、共に配慮しながら、共に支え合いながら共に歩いていきたいと願っておりますので、どうぞ宜しくお願い致します。

今年2月17日から、全世界の主の教会の暦では「四旬節（しじゅんせつ）」という時期に入り、イースターの主日の前日（4月3日土曜日）まで四旬節が続いています。この「四旬」というのは「40」という意味です。つまり、四旬節は「イエス様の私がかため受けられた受難と十字架を深く覚え、新たに悔い改め・祈り・断食・慈善の敬虔な生活を送る40日間（主日（日曜日）は主の復活を喜び日として除いた日を数えて40日間）」のことです。その初日を「（悔い改めの）灰の水曜日（Ash Wednesday）」と呼びます。英語圏では「レント（Lent）」と呼びますが、これはもともと「春」という意味のゲルマン語だそうです。ですから四旬節は「春（復活）を待ち望む期間」とも言えます。枯れていた草木が息を吹き返す復活の季節春を待ち望む気持ちと、主の復活を待ち望む気持ちと少し似ているのかも知れません。全世界のキリスト教会はA.D. 325年以来、今年も全世界がコロナ禍の中にあっても、変わらず40日間、キリストの受難に参加する思いで、断食や悔い改め、そして、愛の分かち合いを実践しながら、全てを新しく回復させて下さる復活の主を心から待ち望みつつ、イースターを備えようとしています。本日から我らの教会も全礼拝、アワナクラブ、牧場、学び、祈り会などようやく再開となりました。クリスチャンプレイズチャーチの全信仰の家族我らもみな今も生きておられ、我らとともにおられ、臨在される主の前で共に我らの身も心構えを新たにし、一層キリストを信じる信仰と愛で一つとなり、分かち合って前進して行きましょう。

<1自分が小さく感じてしまう時は>

みなさんはいつ、どんな時に御自身ももっとも小さく感じられますか。もっと大きく、高く、やる気満々で目標を立てた通り目指して大胆に進みたいと思いつつも、昨年から続くコロナ禍の中で振り返って見ると、なかなか思ったままではうまく出来ず、時には自分が小さすぎないと思うと、なんとなく劣等感に抱えたり、萎縮（いしゆく）してしまう自身を感じてしまう時があったのではないのでしょうか。気が小さい、肝玉（きもだま）が小さい、声が小さい、身長が低くて、年がまだ若くて、能力が小さくて、収入が少なくてなどこの「小さい」ことについて、

人は嫌う傾向があります。自分より大きな壁に直面する時、人は自分の限界や無気力を感じ、自分が最も小さくそう感じられてしまう時があるでしょう。自分ではどうしようもないゴリヤテのような恐ろしい存在の前にぶつかってしまった時、自分一人では到底解決出来なさそうな大きな問題の前にかかえてしまっている時、自力（じりき）で必死に戦っても、ゴリヤテのような自分の能力をはるかに超える高いハードルを感じてしまい、なかなか超えられなさそうに挫折し落胆してしまう時、自分があんまりにも小さすぎると考え込んでしまう時もあります。みなさんはいかがでしょう。人生の中でこんな経験を何度もされて来たと思われま。希望を持って始まった今年中にも、もしもそのように自分は小さすぎると感じ、萎縮してしまう時が来るかも知れません。今までのみなさんの人生の道のりの中、そのような場合にはみなさんはどうされましたか。もし、そのような状況に直面したら、みなさんはどう反応すると思われま。

<2小さな事が最も大切である！>

まず、今日の本文に詳しく入る前に、一つ聖書に現われている大切な聖書の価値観や信仰の姿勢では大きな事の為には小さい事が最も大切であり、決して小さなこと、些細なことをかるんじてはならない事をよく教えて下さっています。大きな事に対する勝負は実は小さなことによるともよく教えて下さっています。

ルカの福音書16章10節に、「最も小さなことに忠実な人は、大きなことにも忠実であり、最も小さなことに不忠実な人は、大きいことにも不忠実です。」

実際、我々の生活において意外に小さな、些細なことがもっと大事に発揮される時も多くあります。

大きなことは小さなことから始まります。小さい力が集まって、繰り返されるともっと大きい力を発揮することができます。にっこりと笑ってくれるほほえみと笑顔、小さな思い遣りの親切さ、小さな配慮の身振（ぶり）、些細な温かい一

言、些細な思い遣りの助け、小さな愛の分かち合う行動、一言の賞賛、勇気つけられる一言の祈りなどが、その人の人生を変え、夫婦関係を、家庭を変え、人間関係を変え、職場や教会を変え、この世の多くの人々の心と行いを変える影響力を与える場合がよくよくあるでしょう。

イエス様は御国のたとえ話の一つとして、あまりにもよく見えなさそうな、カラシの種のような信仰でもしっかり持つ事の大切さについてよく教えてくださいました。わずかで小さなあのからし種は、あまり目立たないので、何も大したことのないように見えますが、種の中には命があり、一粒(つぶ)の種を蒔かれ、成長すると大きな木となって、多くの実を結ばれ、周りの命を生かせる役割と存在ができると教えて下さいました。そういうわけで小さい種には豊かな実と多くの可能性と輝く未来が含まれているのです。実は、すべてが小さいことから始まります。

人は見て大きな事に注目を浴びて、心を向きやすいのですが、実は小さなことをどれほど、忠実で大切に保つことによって、そこから大きな事が左右される結果に必ずつながることを聖書は強調し教えて下さっています。

タラントのたとえ話の御教えの中でも、神である主人がほめて下さった5タラント、2タラント預かったしもべたちにこう語って下さいました。マタイの福音書25章21節に「主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえは、わずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んで。』人が目に見えることで、数える量で、大きいのは大切に、小さいものはそんな大したことじゃないように判断してしまうだけで、しかし、我々が信じる真の神様の規準では人に小さく見える事が実は、もっと大きくて、重要で大切なかも知れません。最近メッセージを通して、この世の中では激しい苦難と大きな恐れと不安の中で何も出来なさそうな小さすぎる者たちかのように見られたヨセフ、ヨブ、ヨシュアが、どれほど神の前で、尊く、大いに用いられ、祝福されたのか、よく学ばされて来ています。

今日は神様がこの世の小さい者ら、小さいことを通して、どのように大きなことに働かれる打ち勝つように用いて下さるのか旧約の聖書の中で、もっとも小さな存在と力を持っていたあの有名なダビデを通して、神はどう大いに用いて下さったのか、あの有名なダビデとゴリヤテの話をもっとともに学んで見たいと思います。

<3. 一人が大切です！>

今日の本文は旧約聖書の中第一サムエル記17章は多くの方々がよくご存知の戦争内容の話です。ペリシテ人とイスラエル人との戦争が起こり、ペリシテの巨人(きょじん)ゴリヤテという代表的な戦士と少年ダビデの勝負が今日のメインの話です。17章4節によると、ペリシテの国を表すゴリヤテの背は6キュビト半(1キュビト=444.5mm)で2m67cmで、かぶとまでかぶると約3m以上であり、彼が着たよろいの重さだけで5千シケル(約60kg)ほどで、一般の兵士から見ても、デカイ巨人の戦士でした。彼に立ち向かったダビデはまだ少年であり、戦争場を全く経験したことが全然ない、平凡な羊飼いであり、小さいものでした。まだ戦争の現場で人と直接戦った経験も、武技を使ったことも一切ないものでした。

常識的にも、客観的にも、統計学的にも、奇跡的な信じられない話しですが、しかし、みなさんもよくご存知の結論から言うと、小さい少年ダビデがゴリヤテを倒し、打ち勝ちます。結局、ダビデ一人の勝利がイスラエル全体を勝利に引き寄せ、引上げる結末をもたらしたわけであります。ここで大事に教えられる事は、世の考えと違って多くの人たちより、献身した少数！一人が大切であることが分かります！

第一サムエル記17章8-9節を見ると、イスラエルの陣営の全軍隊は、敵軍ペリシテ人の巨人ゴリヤテという一人のため、みんなが恐れて落胆していたことが分かります。ゴリヤテがイスラエルの軍隊に向かって僕と戦おうとする者は一人もいなのか。臆病の者たち、怖がりのやつらだと言いながら、一人を選んで自分と戦わせるようにして見ろと侮辱かけ脅(おびや)かしています。自分と戦う人が自分を打ち殺すなら、ペリシテ全軍隊がイスラエルの奴隷となるからと、自信満々で叫んでいます。しかし、逆にイスラエル軍隊の人々から出た人が負けると、イスラエルの軍隊がペリシテの奴隷とならなければならない状況におわれていました。しかし目の前に立っている天下無敵のような巨大な壁のようなゴリヤテの前に誰一人進んで命をかけて戦おうとする勇士はいないままみな恐れている状況でした。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん!ここで注意深く考えてみたい単語は‘一人’(8節)です。一人と全ペリシテ軍隊が関連されています。一人と全イスラエル軍隊が関連されています。ひとりにすべてがかかっています。ゴリヤテひとりの提案を聞いているサウル王とイスラエルは気をくじかれて非常に恐れています。(本文11節)今イスラエルが非常に恐れ震えている理由は、イスラエル軍の中、あのゴリヤテに対して立ち向かえる、ひとりがいなかったからではないでしょうか!その時、神様がひとりを立たせます。彼の名前は人の全然期待と的外れの何と少

年ダビデでした！ちょうど、父親のお使いで羊飼いだったダビデが兵士として出ている兄貴たちに食べ物と渡しに行ったあの少年ダビデが神に選ばれたわけであります！

< 4. なぜ神様は一人ダビデを選んだのでしょうか。 >

少年ダビデ(「愛される者」という名前の意味)について、聖書では彼が小さい者であることを強調しています。ダビデは父エッサイという人の8人の息子の末っ子で、まだ少年で小さ過ぎたので、まだ戦争にも出られないくらいほど、年齢も、体もまだ小さかったわけであります。なので、当然今まで、戦争などの経験もなく、羊を飼っていた羊飼いに過ぎない存在でした。しかし、神様はだからこそ、あのダビデを用いておられたかもしれません。ダビデは小さい石で巨人ゴリヤテを倒し、ゴリヤテ一人が倒れることにより、イスラエル全体が逆転の勝利をおさめることにつながりました。

この出来事を通して、我々が心に刻むべき大切な教訓はなんでしょうか。

①神は神の前で自分が小さい者であることを認め、神に投げ頼む人を用いて勝利をおさめることを喜ばれるお方です。

第一サムエル記16章7節に「主はサムエルに言われた。「彼の容貌(ようぼう)や、背の高さをみてはならない。わたしは彼を退け(しりぞけ)ている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。」

神がその人の外見より、その人の心の中、内面を大事に見ておられるという意味です。人の心、内面はすぐには表されませんが、よく観察すればわかります。神様は大切に用いられる人々にまず内側(人格、品性、考え方、価値観など)の訓練をさせ、よく聖書を通して学んで来ています。そして、それから主の働きをさせます。内側の訓練ができていない人に働きをさせるのは、まるで包丁を使えない子どもに、包丁を預けるのと同じです。銃を撃てない子どもに銃を預けるのと同じかも知れません。神に喜ばされる働きは良い品性から滲(にじ)み出る働きです。信仰が神様との関わりであるなら、品性は主に人との関わりを意味します。問題は関係の訓練ができていない人々が働く場合、物事がうまく行ったり、大いに用いられると、すぐ高慢になるか、多くの人を傷つけるかですので、神は働きをさせる前に先に、心、内側の品性、人格、考え方、大切にする価値観を磨かせてくださるのです。

その中でも神は何よりも謙遜を用いられるために一番大事に見ておられることが「謙遜」であることが分かります！聖書が教えて下さる謙遜な人はどんな人でしょうか。聖書で、神が大いに用いて下さった人の中で、自分が大きいと思う人を用いて下さったことが決してありません！謙遜は、神の前で自分の限界、弱さ、足りなさ、罪深さを持っている小さい者だと常に正直に認めつつ、だからどんな時にも神を絶対信頼し、投げ頼むその人こそ、神の前では謙遜な人だと見なして下さっていることが分かります。神の前で正直で謙っている者を選んで用いられます。

なぜ謙遜が神に大切な用いられる基準になっているのでしょうか。

神の御子イエスキリストご自身が謙遜になられたお方だからです。イエスキリストの持っておられる体表的な内面、品性、心そのものが謙遜だったからであります！

*ピリピ人への手紙2章5-11節は、イエス様の生涯を圧縮した箇所です。この御言葉に隠されている一番大切なイエス様の品性が謙遜と従順でした。「5キリスト・イエスのうちにあるこの思いを、あなたがたの間でも抱きなさい。6キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、7ご自分を空(むな)しくして、しもべ(仕える者)の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現われ、8自分を低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。9それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました(ピリピ人への手紙2章5-9節)」

イエス様の内面の姿において一番美しい品性が謙遜だと言えます。イエス様はみずから謙遜な方だと言われました。

「わたしは心が柔和(優しく)で、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。(マタイの福音書11章29節)」

そして、第一サムエル記を通して、もう一つ心に刻んでおくべき事実は、神様が自分を小さい者だと認め、神にへり下さって投げ頼む人を選んだとしても、その人が高慢になると、その人を用いてくださらなくなってしまうということです。ダビデの時代の当時イスラエルの王はサウルでした。彼はイスラエルの初代の王様でありました。

聖書によると、彼は背が高かったのですが、神の前で自分が小さい者だと素直に認めていた時に、神は彼をイスラエルの王として選ばれました。しかし、彼が王になってから、高慢になってしまい、それ以上神様の御言葉に聞き従わなかった時に、神にこれ以上サウル王を用いられず、見捨てられたことが分かります。神の前で高ぶってしまったサウル王が神に逆らった時、当時神の預言者だったサムエルが彼に言った言葉を聞いて見て下さい。第一サムエル15章17節です。「サムエルは言った。「あなたは、自分の目には小さい者であっても、イスラエルの諸部族のかしらではありませんか。主があなたに油を注ぎ、イスラエルの王とされたのです。」

神様が高慢になったサウル王を王位から退け、次の王として選んだ人が今日このダビデでした！
聖書はそのダビデがえっ齊の8人の子の中“末っ子”だったことを強調します(第一サムエル17:14)。
預言者サムエルがサウルの代わりに王になる人を選んで油を注ぐためにエッサイの家に行きます。その時サムエルさえも当然、イスラエルの王になる人は、格好もよく、十分資格があるだろうと思った長男エリアブが選ばれると思いましたが、神様は格好よく、勇士であるエッサイの息子らをお選びになりません。その時、サムエルがエッサイにまだ息子がいるのかと聞きます。すると父エッサイは末っ子が残っていますが、人間的に考えた時にまだ子どもで、体も小さなダビデは王様としては決して資格がないかと思っていたので呼ぶことすらしなかったわけでありました。しかし、神様はこの小さい者ダビデを選ばれ、油を注ぐようにと命じられます。(第一サムエル16章11-13節)。

人は知らなくても、神は、ダビデが全能なる神の前で自分はいつも小さい者であり、謙遜な人であることをご存知だったからです。ダビデはまだ少年でしたが、だれより彼の信仰と心は神の前で謙遜さを保っていた人はずでしょう。神の前でいつも謙遜だった羊飼いだビデが王になった時も、彼は神様の恵みを賛美し感謝していました。すべての勝利が神様にあることを告白し、忘れませんでした。

詩篇(主に頼る、主を恐れる、主に信頼する表現が、47回)でダビデがどれほど、謙遜な信仰と姿を保って神に抛り頼み、信頼していたのか見られる箇所が多く見られます。

*詩篇71篇6-7節「私は生まれたときからあなたに抱かれています。あなたは私を母の胎(たい)から取り上げた方。わたしはいつもあなたを賛美しています。7私は多くの人にとって奇跡と思われました。あなたが私の力強い避け所だからです。」*詩篇22篇10節「生まれる前から、私はあなたにゆだねられました。母の胎内にいたときからあなたは私の神です。」*詩篇60篇12節「神にあって私たちは力ある働きをします。神が私たちの敵を踏みつけて下さいます。」*詩篇20篇7節「ある者は戦車(いくさぐるま)を、ある者は馬を求め。しかし私たちは私たちの神主の御名を呼び求める。」*詩篇62篇8節「民よ。どんなときにも神に信頼せよ。あなたがたの心を神の御前に注ぎ出せ。神はわれらの避け所である。」*115篇11節「主を恐れる者たちよ。主に信頼せよ。主こそ助けまた盾(たて)」

愛する信仰の家族のみなさん！ どうして神様は謙遜に小さい者を通して大勝利をさせようとされるのでしょうか。そうすることにより神の栄光が現されるからです。神は自分を高くする者を低くさせて用いられます！神様は大きい者は小さくして用いられます！神様は強いものは弱くして用いられます！それが神の聖書の原則であることが分かります！逆、神様は低いものは高く上げてくださいます！小さいものは大きく持ち上げてくださいます！弱いものは強くしてくださいます！これがまさに神様の逆説の真理ではありませんか。

人がいつ神に心から信じ、心から神の御救いを、御助けを、見守りを求めるのかよく振り返って見ると、人が正直に自分の限界、弱さを認め、自分が小さな者だと自覚している時ではありませんか。

愛するみなさん、自分の存在が小さくて、自分の力が弱くて、持っているものが少なく、能力がないといって劣等感にとらわれないように気をつけてください。大きい者のような人と比べないようにしてください。むしろ自分の小ささを謙遜に変え、神様を頼り、神様の助けをもっと求めるチャンスとして用いる人こそ、神様の御前で、神の助けによって大事な働きのために、大きく用いられる者になると信じます。神様は謙遜な人に恵みを施して下さると約束されました。

ですから、謙遜は、神様が我らに与えて下さった最も美しい品性であり、ギフトです。弱さが謙遜の衣を着れば、私たちも、今日ダビデのように、信仰の英雄たちのように、大切に、大いに用いられることになるでしょう。しかし、弱さが劣等感に変わるなら、神はそれが癒されるまで私たちを用いられません。今、すべてにおいて神だけに抛り頼む謙遜の衣に着替えましょう。「神は、さらに豊かな恵みを与えてくださる」と。それで、こう言われています。「神は、高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える。(ヤコブの手紙4章6節)」アーメン！「ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下(もと)にへりくだりなさい。神は、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてくださいます。(第一ペテロの手紙5章6節)」

「主を恐れることは知恵の訓戒(くんかい)。謙遜は榮譽(えいよ)に先立つ。(箴言15章33節)」
有名な神学者パーケーパルマル(Parker J. Palmer)はこう言われました。「謙遜は我々を低いところに導く。そこは立っていても安全で、倒れても平気な地である。謙遜はその中でもっと充満な自我を見いだすことができるように我らを導く。」神の前でいつも謙遜に自分の限界、弱さ、罪深さを認め、神の御力に抛り頼み、従おうとする者となり、神の全能なる御手の中で用いられ、自分の前にある壁を打ち壊し、勝利することが出来る事を今年も一年中となりますよう

に切にお祈り申し上げます。

②人は足りなくても、信頼があると自分にある全ての力を発揮することができます。(信頼の力)

ダビデがゴリヤテと戦うことができたという自体が奇跡ではないでしょうか。巨人ゴリヤテの前でみんなが震え恐れている場にダビデが現われます。そしてダビデは正義の怒りを表します。‘いったいゴリヤテがだれかといって生きておられる神の御名とその軍隊を侮辱させるのか’ときよい怒りをい দিয়ে自分がゴリヤテと戦うと申し出ています。

サウル王はダビデの話聞いて彼を呼びます。サウル王の反応は当然始め否定的だったでしょう。

第一サムエル17章33節、「サウルはダビデに言った。「あなたは、あのペリシテ人のところへ行って、あれと戦うことはできない。あなたはまだ若いし、あれは若い時から戦士(せんし)だったのだから。」

しかし、ダビデはサウル王を説得します。今まで自分がどうやって父の羊を守ったか、神が自分をどうやって助けてくださったのかを証します。その内容が第一サムエル17章34-37節の内容です。

ダビデの話聞いていたサウル王は彼にゴリヤテと戦うチャンスを与えます。これは大変危険な冒険に間違いありません。戦争の経験がまったくなかったまだ幼少年にメイン選手として命をかけて戦えるチャンスを与えたのです。サウル王が一応彼を信頼し、戦える機会を与えます。ここで、みなさん、我々が学ぶべき原則があります。それは信頼の原則です。

人は足りなくても自分を信頼してくれる人の期待に応じて必死に行動し、努力します。小さい者でもだれかが自分を信じ、励ましてくれれば大きい力を発揮するようになります。事実ダビデを信頼してくださった方はサウル王の以前、神様です！そしてサムエル預言者もいました！

ダビデは神様に選ばされサムエルを通して油注がれました！その日以来、ダビデに神様の霊が強く働かれたと聖書は言っています。家のほかの兄弟たちもダビデを無視してました。しかし神様が彼を信頼し、認めて下さったのです。サムエル預言者もダビデを信頼してくれました。サウル王も仕方なく、とりあえずダビデを信頼しています。

<人に信頼を得られる4つの要素：品性・体験・成果・動機>

ここでみなさん！ダビデがどうやってサウル王の信頼を得るようになったのでしょうか。

ダビデが何もせずに、サウル王や人からの信頼と機会を得たのでは決してありません。

スティブンM.Rコビーは人に信頼を得るのに4つが必要な要素があると指摘します。つまり、品性、経験、成果、動機です。

ダビデはまだ少年でしたが、この4つを全部満たしていたので、サウル王が信頼してくれたとも言えると思います。

まず、ダビデの品性をみてください。彼は謙遜でありながら、父の羊一匹を守るために命をかけました。彼は誠実でした。自分に預かっていた飼っている羊を一匹の命を守るために、逃げられず、獅子や獣たちと戦えるほど、どんな犠牲を払っても責任を果たそうとする心の強い責任感と勇気を保っていたことが分かります。

そして、彼は戦争の経験はなかったのですが、命をかけて、何度も危険な戦いを今まで体験と自分なりの能力をつんできました。ダビデが獅子と熊を倒して羊たちを守るほどだったのであれば、ゴリヤテを倒すことなんて不可能なはずはないことをサウル王も判断されたのではないかと思います。また人々に信頼を与えるのは力量(体験)です。どんなにいい品性を持っていたとしても、それだけでもすべてを信頼されるということはたやすくはないと思います。経験による自分の実力が伴うべきではないでしょうか。

例えば、私は私の妻がとつてもまじめで優しい人であろうと、妻がとつぜん飛行機を運転しだいからと言って、私に乗れという私に絶対に乗らないでしょう。なぜですか。妻は飛行機を運転したこともないし、その力もないからです。

そして、ダビデは敵と戦って殺す戦争の経験はまったくありませんでしたが、命をかけて熊と獅子と戦いながら何度も羊を救い、守って来たその成果があったので少年でありながらも信頼を得ることが出来ました。ですからダビデはすでに自分も知らないうちに戦いの技術と経験を十分つんでいたことがわかります。

ダビデがゴリヤテを倒す時、小さい石を使いました。彼は羊飼いでした。父の羊を守るために彼は石を投げることを何度も何度も繰り返し練習して成れてきたのではないのでしょうか。ですからみなさん、わずかな技術でも繰り返し慣れさせれば卓越した自分のものまで至るように、小さな事でも繰り返し、続けることに力があります。続けられないのに、最善の成果と勝利の体験をしたいと思う事自体が間違いではないのでしょうか。なんの隙間が見えなさそうだった、ゴリヤテでしたが、ダビデの目には獅子と熊に立ち向かったように、迷わなく立ち向かおうとしていました。そして、立ち向かう時に、すぐさまゴリヤテの隙間を見つけます。それはゴリヤテの額(ひたい)でした。なれていたからすぐ分か

ります。すぐ見つけました。繰り返し続けてやって来たからです。いきなりでは突然ではありませんでした。ですから少なくともこの小石を投げることはだれに負けない技術と実力を持っていたと言っても間違いないでしょう。その信頼を結果、戦いに出て見事にゴリヤテを倒す勝利を得られたのではないのでしょうか。

ですから愛するみなさん!みなさんの日常の生活や小さな事でもつづけてやっている事を無視しないでください。普段みなさんの生活で繰り返されていることをけっしてないがしろに考えないでください。些細に見えていても、それを誠実に繰り返し、続ける時それが実力となり、自分の力量になって神様にその部分において尊く用いられるチャンスとなれると信じます(日常の祈り生活、御言葉の黙想生活も大切にすれば、どれほど、神に素晴らしく祝福され、知恵のある人生として大いに用いられるではないでしょうか)些細なことを軽んじてはいけません!これらはのちに大きい事をなすのにかならず大きい力になると信じます。

そしてダビデは信頼を得られたのは、彼の‘動機’があったからです。ダビデは自分の羊ではなく父が預けた羊のためにいのちをかけました。彼は今ゴリヤテとの戦いも神様の御名のために戦おうとしました。神の御名の栄光のために彼は戦おうとしました(本文45節)。愛する信仰の家族のみなさん!神の前でいくら経験が豊かであり、いくら実力があるとしても、神の栄光を現すために、神が喜ばれることのために、その動機を持った神は人を多く用いて下さいました。そして、人も実力も大事にしますが、この動機をよく大事に見て、信頼を与えます。

どんな動機ですか、どんな意図(いと)でするのがとつても大切です。神様もダビデの表を見ずに、その中心を見られたと言われました。ダビデは献身的な人でした。イスラエルの軍隊の中唯一彼は神様の為に自分の命まで惜しまずにかけることができた人ではありませんか。サウル王が少年ダビデを信頼することができたのは彼のその献身的な姿ではないかとも思われます。なぜなら、だれもゴリヤテと戦うとしない状況なのに、いのちをかけて献身を見せたのがダビデだったからです。

もしかするとサウル王はダビデの犠牲をとおして気を落としているイスラエルの軍事たちに刺激を与えようとした隠れた意図もあったかもしれません!

<結論：究極的な勝利は神の御力と御助けにゆえであった!>

しかし愛するみなさん!ダビデがどんなに素晴らしい品性と動機をもっていて、技術と力量を持っていたとしても、神様の助けがなかったなら、決してこのような勝利をおさめるという結果をもたらすことができなかったことを聖書は教えて下さっています。

少年ダビデがどれだけ石を投げるのにすばやく、力があつたとしても人の額に打ち込まれるほどはけっしてできないことでしょう。しかし、ダビデが投げた石がゴリヤテの額に打ち込まれたと聖書は言っています。彼が投げた石が飛ぶ時、神様が力を増して下さってたった一度で人の額に打ち込まれるようになったということを私たちは忘れてはいけません。今、ダビデは一人で戦争場に出たではありません。ダビデのうしろに神様がともにおられたことを覚えなければなりません。自分の力に限界があり、力が足りない人は神様の御力を頂かなければなりません。ダビデは神の御力をこのように賛美しています。*詩篇18篇1-3節「彼は言った。わがちからなる主よ。私はあなたを慕います。2主はわが巖(いわお)、わが砦(とりで)、わが救い主。身を避けるわが岩、わが神、わが盾(たて)、わが救いの角(つの)、わがやぐら」*詩篇28篇7節「主は私の力。私の盾。私の心は主に抛り頼み、私は助けられた。」

メッセージをまとめます。

愛するクリスチャンプレイズの信仰の家族のみなさん!今年中にも、いやもう先週の中にも、私たちが数多く様々な戦いの中で生きているではありませんか。時には想定出来る戦いの時は大丈夫ですが、まるでデカイ壁のようなゴリヤテとの戦いになる時、我々をしきりに無気力にさせ、自己憐憫に陥らせる時もたくさんあります。自分の力ではどうても打ち勝つことができなさそうな巨人のような強敵がたくさんあります。こんな時、我々はどうすべきでしょうか。

自分の力に神様の力を重ね、まし加えなければなりません。神様の力を抛り頼み、進むべきです!!

自分のわずかな力に神の力を増せば、我々が勝てないことはありません。乗り越えられない壁はありません。

今日ダビデのように謙遜になり、神の御力の手をつかみましょう。すべての戦いは神の全能なる御力の御手の中にあります。すべては小さいことから始まります。今日神様は小さい一人ひとり、わずかな力に神の力を与え用いて勝利に導かれます。神の御力を共に頂き、今年も勝利を体験して行く信仰のクリスチャンプレイズチャーチの家族みなさんとなりますように主イエスキリストの御名によってお祈り申し上げます。アーメン!